

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

入り口付近にあるカウンターの中には、あごから頬にかけてひげをたくわえた四十歳くらいの男性職員が座っている。いつも忙しそうに書類に目を通して人々で、閲覧室に入ってくる人をその細い目でじろりと見る。きまって不機嫌そうな顔をしている。

まえにわたしはある本を探すために、このひげの職員に話しかけたことがあった。その時、わたしの奇妙な声を聴き、この人は露骨に嫌な顔をした。そのことがあってから、この人だけはあまりいい印象をもっていない。でも、そんなことを差し引いたとしても、^①この閲覧室はわたしにとつては最高の場所だった。

閲覧室の中は天井が高く、奥行きのある造りになっていた。古いコンクリートの柱が高い天井を支え、そしてその柱によりさうようにして書架がならんでいた。天井近くの壁にはステンドグラスをまねたような丸い窓がいくつもあり、やや薄暗いように感じる館内に、そこから斜めに光がさしこんでいた。

閲覧室にある蔵書のあちこちからインクのおいがしていた。わたしが好きな香りで、何かほっとする安心感を与えてくれた。

閲覧室の奥には古書や専門書関係の書架が多くなっていた。奥に行けば行くほどほこりっぽく、それでいてとても懐かしいにおいが漂っていた。

わたしはいつもここに来ると、自分が深い海の底を漂う魚になったような気分になる。一匹の深海魚が、誰の目にとまることもなく自由に書架の間を抜け、本の中を泳ぎまわっている。そんな姿を想像した。全ての音が消えた静かな世界だ。

閲覧室のいちばん奥は段差があつて少し床が低くなつていた。そこにもいくつかの書架と閲覧用のテーブルがあつて、わたしはそのスペースで大半の時間を過ごしていた。主に外国古典文学のコーナーとなつていたが、その中のひとつに、古い外国児童文学の本ばかりが集められている書架があつた。わたしはいつもこの書架の本を手にしていた。

そこには、分厚い表紙の訳書やくしょがずらりとならんでいた。赤茶けた表紙のシリーズ本。アマゾン号、グリーンノウ、ドリトル……。おそらくはもう何十年も前に出版された本だろう。背表紙がすりきれて題名が読みとれない本がいくつもあつた。

その書架にある本は、全て館外持ちだし禁止となつていた。

つまり、他の本のように借りだすことはできないものだった。それだけ古くて貴重な本だということなのだろう。

②ここに来るようになって以来、わたしはこの書架の本ばかりを読んでいた。正確に数えたことがないからはずきりしないが、もうかなりの数の本を読んだと思う。

これはわたしにしてみれば、すごいことだった。

わたしは本を読むのが苦手だった。小さい頃からずっとそうだ。

マンガのような短い文ならなんとかなる。でも少し長い文になつたり複雑な文になつたりすると、とたんにだめになる。難しい言葉が多いとさらにお手上げになつてしまう。

けれどもここにある本は違った。ひとつひとつの文章がわたしの中にある文章のリズムと不思議ふしぎなくらいにじんだ。ほかの子が読むと言ひ回しが古くさいのかもしれない。けれどそれがわたしにとってはおかえつて魅力的みりよくてきに思えた。次から次に本を読もうという気にさせた。

わたしは書架のいちばん下の段から、灰色の背表紙をした本を引きだした。布を貼つた装丁そうちやうはあちこちがすり切れている。ずいぶん昔に書かれた本だった。

『死の谷の王女』

それがこの本の題名だった。

わたしがこの本を見つけたのは、ひと月ほど前だった。

下の段、豪華なシリーズ本のかげに隠れるようにして、この本はならんでいた。今まで何度もこの書架は見えたはずなのに、この本を見つけたのはその時が初めてだった。③どこからか急にあらわれたような、そんな

() な感じがした。

わたしは本を開いた。^④最初にこの本を開いた時もそうだったが、わずかに薔薇の香りが漂ったような気がした。でも、それはいつも一瞬のことで、もう一度嗅ごうとした時には、その不思議な香りは消え去っていた。わたしは、物語の最初の部分に目を落とした。

うなされるようにして目を覚ました^⑤少女は、自分が薄暗い病院の廊下^{ろうか}にいることに気づきました。いつのまにか眠っていたのだと彼女は思いました。

奇妙な書きだしの物語だった。最初は何か怖い^{こわ}気もしたが、いつのまにか引きこまれるように、先を読み進めていた。

少女は病院の手術室前の椅子^{いす}に座り、母親の手術が終わるのを待っていた。そこに、不思議な老女が現れる。少女の横には父と姉が座っていたが、二人は不思議なことに眠ったままで、少女が肩を揺す^ゆっても、目を覚ま^さそうとはしなかった。

最初、少女はそこに鏡があつて自分の姿がうつっているのだと思いました。でもそれは彼女のような子どもではなく、灰色の服を着た背の高い女の人でした。束ねた白髪^{はくはつ}が背中に揺れているのが見え、その人

が老女だということがわかりました。けれど、老女の顔はつややかで皺^{しわ}ひとつありませんでした。白髪を目にしなければ、きっと若々しい女の人と思ったことでしょう。

老女は少女に、母親は死ぬ運命にあると告げ、母親を助けたければ「死の谷の王女」に会いに行けと言うのだった。

そして、少女の前に地下へと続く石段が姿を見せた。

老女は深緑色のスチール製の扉^{とびら}をゆっくりと指さしました。少女の目の前で扉が音もなく開き、苔むした石の階段がその奥に姿をあらわしたのです。

あまりのことに、少女は声をあげることもできませんでした。

「この道は死の谷へと続いている。さあ、早くでかけることだね、この扉が閉じてしまわぬうちに」
石段は奥にむかつてずっと続いていました。けれどもそのさらに奥になると真っ暗で何も見えません。ただ、ひんやりとした空気が、扉の奥から流れだしてきていました。

「わたしにはできない」

少女は助けを求め姉さんを見ました。けれども、姉さんはあいかわらず眠ったままです。

少女は、なぜ自分がこの扉の奥に進まなければならないのだろうか、自分なんかよりも姉さんが行けばいいのと思いました。姉さんは自分とは違い、なんでもうまくできる人です。勉強も運動もできました。いつもみんなの中心にいましたし、みんなから愛されていました。もう何年も前に卒業しているというのに、学校の先生たちも少女の前で姉さんのことをよく話しました。

でも、わたしは違ふと少女は思いました。勉強も運動も苦手でしたし、学校でもいつも一人ぼっちでした。不器用でひっこみ思案で、自分の気持ちをうまく人に伝えることができませんでした。

拒んでいた少女も、やがて母親を助けるために旅立つことを決心した。それはほんとうに健気な決心だった。

「今おまえがこの扉をくぐることを拒めば、おまえは⑥大事なものを失うことになる。おまえは逃げる」とができない。おまえは死の谷の王女に会わねばならない」

それ以上老女はなにも言いませんでした。少女が老女のほうを見ると、老女はゆっくりとうなずきました。

少女はその扉の中に足を踏み入れました。そして、さらに一歩踏み出した時、扉は突然背後で閉まりました。気づいた時には少女は、暗闇の中に一人立ちつくしていたのでした。

こうして死の谷をめざす少女の物語は始まっていた。

わたしは閲覧室ですこしずつこの本を読み進めた。

難しい言葉がならんでいて、わかりにくい箇所もたくさんあった。国語辞典をもってきて一語一語意味を調べながら読んだりもした。でも苦痛ではなかった。苦痛どころか喜びだった。本を読むことのすばらしさをあらためて感じた。

⑦わたしは、読み進んでいくうちにその少女と一体になっていく自分を感じていた。

(福田隆裕「この素晴らしき世界に生まれて」より)

問一 ― ①「この閲覧室はわたしにとっては最高の場所だった」とありますが、閲覧室にいくとわたしはどういう気持ちになりますか。比喻(たとえ)を使って説明している部分を、本文中から二十字以内で書きぬきなさい。

問二 ― ②「ここに来るようになって以来、わたしはこの書架の本ばかりを読んで」とありますが、それはなぜですか。その理由を本文中の言葉を使って説明しなさい。

問三 ―③「どこからか急にあらわれたような、そんな（ ）な感じがした」とありますが、（ ）にあてはまる二字熟語を本文中から書きぬきなさい。

問四 ―④「最初にこの本を開いた時もそうだったが、わずかに薔薇ばらの香りが漂ったような気がした」とありますが、この本を含めてどういう種類の本を開いた時に、そう感じたのでしょうか。「 書架の本」という形で答えるとして、「 〃」にあてはまる言葉を、―④より前の本文中から二十一字で書きぬきなさい。

問五 ―⑤「少女」の人物像（性格）が書かれているひと続きの二文を探し、その始めの五字を書きぬきなさい。

問六 ―⑥「大事なもの」とは何ですか。「母親の 〃」という形で答えるとして、「 〃」の当てはまる漢字一字を書きなさい。

問七 ―⑦「わたしは、読み進んでいくうちにその少女と一体になっていく自分を感じていた」について、
(1)「わたし」は「少女」と一体になっていくことで、どういう気持ちに変化していったと想像できますか。
あなたの考えをふくめて説明しなさい。

(2) また、このように作品の中の主人公と自分が一体となったように感じたあなたの読書体験を書きなさい。
具体的な作品名、主人公名をあげ、どのような場面、またはどのような点で一体感を感じたかを必ず書き入れなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

チンパンジーにも、食わずぎらいがあります。

チンパンジーの子育てで特徴的なのは、離乳期りにようちきが来ても親が子にエサをやらないということです。たとえば飼育係しいくがバナナを与えたとき、親は子どもを足で押さえてバナナを取りに行かせません。ところが親は平然と食べている。①人間の常識からすると信じられない光景です。

こちらとしては子どもに食べさせてやりたいのですが、飼育係には、動物の親子関係かいにゆうに介入することができません。

では、そんなチンパンジーの子どもは、どうやって食べることを学ぶのでしょうか。

子どもはいつも、お母さんの口もとをジッと見ています。母親の口から食べこぼしがボロッと落ちてくる。その瞬間に、子どもはパツと取って口に運びます。チンパンジーの子どもは、この「食べこぼし教育」によって、母親の食べこぼしと同じ匂い、同じ味のものを食べてもいいと学習していきます。しばらくたつと、親の力を借りずに、自力で安全な食べ物を探し出せるようになるのです。

ゴリラもチンパンジーもそうですが、野生動物は食べ物にすごく保守的^{ほしゆ}で、食べたことがあるもの以外は、口にしようとしません。^③人間の食わずぎらいとは少しちがいますが、野生動物の世界では、食わずぎらいはあたりまえなのです。

では、そんな^④ゴリラやチンパンジーの食生活から、人間が学ぶことはなんでしょう。

子どもがいちばん信頼している人が、とてもおいしそうにものを食べる。そのことがとてもだいじだということです。親がなんでもおいしそうに食べて、「ほら、おまえもお食べよ」なんて言ってくれたら、子どもから好ききらいなんてなくなりますよ。家族みんながおいしそうに食べる、これが親子関係の基本だと思うのです。

（小菅正夫「ペンギンの教え」より）

問一 ― ①「人間の常識からすると信じられない光景」とありますが、人間の常識ではどうするでしょうか。考えて説明しなさい。

問二 ― ②「食べこぼし教育」とはどんな教育ですか。本文中のことばをつかって書きなさい。

問三 ― ③「人間の食わずぎらいとは少しちがいます」とありますが、どちらがうのですか。説明しなさい。

問四 ― ④「ゴリラやチンパンジーの食生活から、人間が学ぶことはなんでしょう」とありますが、筆者は何だと考えているのでしょうか。本文中のことばをつかって書きなさい。

問五 「親子関係」について、この文章を読んであなたが感じた意見や感想を、あとの指示にしたがって書きなさい。

・ 字数は百二十字以上、百六十字以内とします。

・ 原稿用紙の正しい使い方にのっとり、丁寧な字で記入してください。

三 次の各問題に答えなさい。

問一 次の①～⑤の―線部の漢字には読み仮名をつけ、⑥～⑩の―線部の仮名は漢字に直して書きなさい。必要に応じて送り仮名もつけなさい。

- ①株主総会が開かれる。
- ②海岸沿いに列車が走る。
- ③宣戦布告する。
- ④舞台の裏方を務める。
- ⑤長幼の序を重んじる。
- ⑥古代ジュウキヨからの出土品。
- ⑦みんなの話にクワワル。
- ⑧原料不足でゲンサンする。
- ⑨名前もツゲずに立ち去る。
- ⑩シヨウエネに協力する。

問二 次の①～⑤の俳句の― にあてはまる言葉を、あとのア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ①― とんぼ筑波に雲もなかりけり まさおかしき
正岡子規
- ②散る桜海― ければ海へ散る たかやせうしゅう
高屋窓秋

- ③親よりも― き羊や今朝の秋 きじょう
村上鬼城
- ④― 色の秋上品の仏かな きよし
高浜虚子
- ⑤雨くらく晴れても寒く菊― かな しゅうおうし
水原秋櫻子

- ア 白
- イ 青
- ウ 金
- エ 黄
- オ 赤

問三 次の①～⑤のことわざの― にあてはまる言葉を、あとのア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ①井の中の― 大海を知らず ②― の遠吠え
- ③― を追う者は山を見ず ④― 百まで踊り忘れず
- ⑤― 耳をとる

- ア 鹿 しか
- イ 蛙 かむす
- ウ 牛
- エ 犬
- オ 雀 すずめ